



Title	インド部族伝統鑄金 ドグラとその意匠
Author(s)	足立, 眞三
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 125-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53220
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

インド部族伝統鑄金 ドクラとその意匠

足立眞三

ビハール州北部の平原を東西に流れるガンジス河中流南側に位置するラジマハール丘陵、その南に大きく横たわるチョタナグプール高原、さらに南は東ガーツ山脈が伸び、東はベンガル湾に遮られた数州に跨がる広大な高原地帯はジャングルと丘陵に守られた非アーリヤ系高地民族の居住区域である。彼らはアーリヤ進入以前からインドに住んでいた原住民で独自の文化を形成してきた。ドクラ達はこの高地民族の周辺をジブシーのように村から村へ移動しながら鑄金を生業としていた。

西ベンガルでは、原住民から移動しながら生活するドクラとしてよく知られていたが、ヒンドウ最下位のカルマカール(Karmakar) 鑄金職人の生活共同体として公式に認められたのは1962年(※1)の事である。それまでドクラの存在すらヒンドウ社会ではわからなかった。

その後ベンガルで名づけられた部族の名称が全インド手工芸委員会により、同じ蠟糸脱蠟法(Sire perdu)を持つ種族の総称として〔ドクラ〕の名称が定着した(※2)。

高地原住民は、狩猟や焼き畑を営んでいたが、時代の進展と共にヒンドーとの接触によるヒンドウ化や職を求めて都市部への適応等(※3)、ドクラは販売対象を失っていった。ドクラの窮状を救うため政府の援助で定住地の提供や製品管理販売の協会を作り、保護と自立育成に努めている。結果として従来からの素朴で力強い造形性は技術の洗練と逆に活き活きた土俗的迫力は

かなり減退している。

1963年発行の記録によるとドクラ達は既にヒンドウの神や神妃をヒンドウ正規のイコンと比較してかなり違う事が記されている。(※4) 元来ヒンドウの教義に則った神像や神妃を作るのはヒンドウ社会、特に南インドではバラモンかバラモンに近い階級の仕事だ。ドクラ自らはヒンドウ教徒だが、前述の如く最下層に属し、神像を作る事はその意味で異例の存在である。

技術的にも脱蠟法はインド世界では、伝統工芸として普遍的技法だが(※5) 蠟糸(後述)により成形するのは、ドクラ以外に無い。

それ故にこそドクラの特徴を示す蠟糸成形による脱蠟法(cire perdue)で、線をベースにした特殊な意匠が数あるインド伝統鑄金工芸の中で、異彩を放っているのだ。

このような技術や表現法が保たれた理由として、丘陵とジャングルに守られた後進地域であった事と、カーストが単に階級差別以外にインド的事情として、世襲によるギルド的機能と、上位カーストが下位カーストとの接触を避ける習慣から、ドクラ自らの職能が今日までヒンドウ鑄金職人に侵されずに保たれた一面も無視できない(※6)。

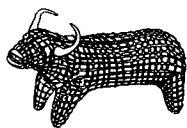
原型制作に使用される蠟糸については密蠟を小さな穴からトコロテン式に押し出して線材を作るMP州のバスタール地方は細い線(太さ0.5~1ミリ)で繊細な造形が可能だ。



1. 部族の英雄
西ベンガル州 バンクラ



2. 部族の英雄
NP州ジャングルダール



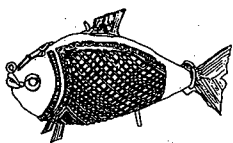
3. 牛
オリッサ州20世紀初



4. 孔雀
オリッサ州20世紀初



5. ガーネッシャ 聖水壺・
西ベンガル州 バンクラ20世紀初



6. 魚
西ベンガル州 バンクラ

西ベンガルの樹脂 (Dhono) は乾燥した沙羅の樹脂と芥子菜の種油を炊いて布で漉し、手打ちソーメンの要領で線材を作る (太さ1.5~2ミリ) が、気候も暑く素材は熱でベトツキやすいので繊細な作業に向いていない。

両地方の民族の英雄を表現した騎乗の戦士像 (図1,2) を比較すると、モチーフは同じでもバンクラ (図1) は荒々しく粗野だが力強い。一方、ジャグダルプールのそれは緻密で丹念な仕事を特徴とする。

この様な造形処理の差以外に、ヒンドウに囲まれた農村地帯で暮らす西ベンガルのバンクラやドリヤプールでは、ヒンドウをテーマにした作品が数多く見られ、高地民族に囲まれ、未だジャングルを背景にしたバスタール地方やオリッサではジャングルの動物をモチーフにした物が数多く見受けられる。

今世紀初期と推定されるオリッサ州の牛 (図3) 孔雀 (図4) はコンド族に供されたものだが同時代と推定されるバンクラの象頭の聖水いれ (図5) が示すようにヒンドウ化速度の違いが確認出来る。しかしながら、バンクラとバスタールでは、距離にして600キロ以上も離れた場所でありながら両地域には、時代とイメージ造形の形態の差を越えて共通する以下の意匠がある。

- ① 過巻き文様 図1,2,4,5
- ② 格子による面の表現 図3,4,5,6
- ③ 線の並列による面の表現 図2,6
- ④ ループ又は蛇行文様 図1,6
- ⑤ 線及びそのヴァリエーションとして縄目、三つ網 図1,2,4

以上の意匠がドクラの基調となっている。

注

- 1 Handi crafts survey monograf on Dhokura Artisan of Dariapur (Bordwan) Census of India 1961 W. B. Sikkim, Table 1 Distribution of Families P3~5, Govt. of India, Calcutta
- 2 Babala Senapati ; Origins and background P2, The Tribal Craft of lost wax Brasscasting, Scorpio Materix, Bhubaneswar 1989
- 3 古屋正伍 ; 都市化とサンタル族, 文化人類学 2 巻 2 号 P. 48 東京都立大学, 1959
- 4 Kalyankumar Gangli : Chapter four P. 24, Designs, in traditional Arts of West Bengal, Govt. of West Bengal, Calcutta 1963
- 5 M. V. KRISHINAN ; Existing traditional techniques in India P. 9. Cire perdue casting in India, New Delhi 1976
- 6 小西正捷 / 佐藤宗一郎 ; 九つの工芸カースト P. 70, インド民芸, 木耳社, 1977

(あだち・しんぞう 大阪芸術大学)